Background information/pictures available online at:
www.toy-worlds-museum-basle.ch
Media, password: swmb

ロシアの聖像

東方正教会の偶像と聖像

２０１４年１１月２９日 - ２０１５年２月８日

トーイワールドミュージアムの特別展示において、Wemhöner-Grabher コレクションより９０点の精巧な聖像が選ばれ展示されます。今回のプライベートコレクションは所蔵主が何代にも渡り収集してきたもので東ヨーロッパでは最も重要なコレクションのひとつと言われています。様々な点で他の東ヨーロッパのプライベートコレクションや公共コレクションとは異なります。その数は７００点あまりにのぼり、Wemhöner-Grabher コレクションはその数、広範囲に及ぶ技巧また画法などすべての面で独特であると言えます。ロシアの聖像のコレクションが大変豊富であることがうかがえると同時に、これらの聖像に関連して民間に普及していた信仰やそのパワーを知ることもできるでしょう。

聖像はキリスト教の重要な信仰の証であります。同時に何世紀にも渡って崇拝されてきた偉大な芸術作品であり、それはこれからも変わることはないでしょう。聖像は特に東方正教会において重要な役割を果たしています。偶像や聖像は版に描かれ教会で聖別されます。東方正教会の神学、信念では大変重要なアイテムであると言えます。Icon（イコン、聖像）という言葉はギリシャ語の eikon（エイコン、像を意味する）が語源となっています。最も古い聖像は紀元１世紀にさかのぼります。

聖像とは何でしょう？

Icon（聖像）と言う言葉は、ギリシャ語で単に「像」または「描写」を意味します。６世紀から正教会の偶像を表すことばとして使われるようになりました。特にその制作方法や材料を示すわけではなく、特徴を表すものとして Icon（聖像）と呼ばれるようになりました。

聖像は東方教会の聖人と偶像を表現した画像です。東方正教会のビザンチン儀式において非常に重要な役割を果たします。像は主に版に描かれ教会で聖別されます。東方教会にとって宗教学的にまた霊性的にも大変重要なアイテムです。東方教会の聖像は芸術作品や装飾品として捉えられてはいませんでした。しかしビザンチン芸術の主要なアイテムではありました。ガラスの裏面に施された画像もあります。コプト教会やアルメニア教会などのオリエンタル正教会でも聖像は崇拝されていました。聖像の目的は、崇拝の心を呼び起こし、傍観者に描写された神や聖人の存在を想起させることでした。つまりは、聖像を見る者と神、俗世界と天上界との結びつきを間接的に呼び起こすことでした。

ロシアにおける聖像の紀元と発展

聖像の発展を正確に知ることができない理由として、敬虔なクリスチャンにとって神を描写するのがタブーであったことが挙げられます。それは聖像破壊論争を引き起こすまでになり、神やキリストや聖者の画像の多くが破壊されました。(726-843 年)　ロシアで正式にキリスト教への改宗が誘起されたのは 988 年のことで、幸いにもロシアでは聖像の支持者と反発者の対立が起きず、結果的にロシアで聖像が発掘されることになりました。843 年、聖像破壊論争の終結した年は、正教会の主日となり、論争なく聖像画や偶像が受け入れられることになりました。そして蒙古との戦いの場でも、聖像は大変重要な役割を果たすことになりました。戦場で聖像は標準として軍隊の先頭に置かれました。聖像の標準と呼ばれました。聖像のいくつかは戦闘を勝ち抜きまたは勝利をもたらしたとして、たくさんのコピーが作られるようになりました。

聖像画法の歴史

聖像はビザンチン芸術の主要な表現方法です。ギリシャとブルガリアで磨かれた芸術ですが、主にロシアで発展しました。１１世紀頃、最初の聖像制作学校が設立されました。キエフ、ノブゴロド、後にブラジミール、トヴェリ、モスクワなどがその中心でした。１６世紀には聖像画のギルドも設立されました。１７世紀には聖像の工房ができ、１９世紀には大きな聖像企業が誕生しました。聖像は特別な板に昔からの製法で作られた卵の染料を塗って制作されました。大変厳しいルールに則り制作されましたが、それでも画家たちは個人の自由を保ち表現することができました。画家達にとって聖像制作は挑戦でもありました。画家の存在は作品の裏に隠れ匿名で作成し、作家のサインが残されることも無かったので、ほんの数人の作家の名前しか判明していません。Feofan Grek と Andrei Rublev が挙げられます。

主題と描写

聖像は、クリスチャンが真理を心に描くのに役立ちます。キリスト、マリア、聖母、使徒、聖者などが描かれていました。キリストにならび聖母マリアが最も多く描かれました。正教会の信仰によると、旧約聖書の預言者の多くが主役になり、聖者も多く描かれ、後期に登場した聖者たちは永遠であるとされていました。聖書の一部や聖者の生活が描かれることもありました。三位一体説や復活などの類型的グループも複製されました。聖像には共通した特徴があり、神学的方法で描かれた西ヨーロッパのポスト・ゴシック様式芸術とは違っていました。

制作過程

聖像の制作には長い時間を要します。色を混ぜるだけでもかなりの時間がかかります。伝統的な技法として、テンペラ画法が使われました。るり、オーカー、朱や卵の黄身などの天然色素が使われ、薄めるためにクワスやビールなどが使われました。テンペラ画法の特徴は、退化を防ぎ、また乾くのに時間がかかるため油絵のようにひびの入ることもあまりありませんでした。乾くのに時間がかかるので、長い時間をかけて作品を仕上げることができました。自然色に金箔を施すことで、独特な色合いや明るさを出すことができました。また、このような色合いが聖像のシンボルとしてうまく活かされました。例えば、金色の背景は天国の輝きを表現し、神や聖者へ導かれるように描かれていました。

***Wemhöner-Grabher プライベートコレクション*の歴史的特長**

西ヨーロッパのプライベートまた一部の公立のコレクションの中でも Wemhöner-Grabher コレクションは様々な面で優れていると言えます。まずその所蔵物の多さを挙げてみても、幅広い芸術技法や画法を凝らした作品が７００点あまりにのぼります。先代のオーナー達が何代にも渡って収集してきたものです。作品はロシアと近隣国の物が多く、当時、芸術作品の仲介者を通しても収集は難しかったと思われます。

コレクションには版に卵のテンペラ画法で描かれた聖像だけでなく、キャンバスにオイルで描かれた肖像も含まれます。彫刻や刺繍が施されたパネルもあり、ヨーロッパでは見つけるのが難しい大きなサイズや希少なアイテムまでコレクションには含まれています。オリジナルの金属カバー（ロシア語で: *oklady*）のある聖像が多数あることも驚くべきことです。打ち出しや彫刻から現代の押型などの芸術的技法も施されています。いくつかの聖像はオリジナルのケース（ロシア語で：*kioty*）に保存されているものさえあります。

材質、芸術性、職人技の多様性だけにとどまらず、*Wemhöner-Grabher* **コレクション**には、主に１８世紀後期からボルシェビキの没収までのロシア宗教画の作品が大変幅広く集められていることも印象的です。

１７世紀の非常に芸術性の高い、文化的にも歴史的にも注目される聖像もコレクションに含まれています。最も古い聖像は 1,600 年頃のものだと言われますが、ほとんどの聖像は 1,750 年ごろから 20 世紀にかけて描かれたものです。

当時のロシアの宗教画は、新しい影響を多々受けました。伝統的な聖像芸術と統合し、新たな図像的モチーフが誕生しました。旧式の画法に手を加え、新しい画法へと導かれたのです。

18 世紀から 19 世紀初頭、イタリアの影響を受けた学術的な絵画も取り入れられました。そのような聖像がロシア教会のあちこちで見つけられました。ドイツのナザレスタイルやビューロン芸術学校の影響も受け、19 世紀後半に聖シノドの帝国高等弁務官、コンスタンチン・ポベドノスツェフによって特に奨励されました。彼は、その芸術形式の作品集をロシアの芸術学校で広めるべく手ほどきをしました。

さらにキエフのセイント・ウラジミール大聖堂の絵を描いた有名な画家、Vaznecov と Verescagin と弟子達のネオロシアの学校も登場しました。彼らはモスクワ大聖堂と協力して、聖像の講習会で手本を示しました。

このような西洋の画法の影響を受けた聖像はロシア国外の個人または公共の美術館で滅多に見ることはありませんでした。西洋の影響を受けた作品だと判断され、地元のコレクターやギャラリーは受け入れなかったのです。しかしながら、そのような聖像は 200 年もの間、宗教芸術と関連しながら 18 世紀から 19 世紀、そして 20 世紀に入っても伝統的ビザンチンスタイルのパネルとして教会や（主に地方の）家庭で一般的に見ることができました。そして今日の教会で、このようなスタイルのロシアの聖像は学術的そして伝統的な聖像芸術の組み合わせとして評価されています。

このような背景に反して、*Wemhöner-Grabher* コレクションは西洋で大変珍しいコレクションとして扱われています。17 世紀初めからのロシアの聖像と宗教画の発展を広範囲にそして明解に知ることができると言われています。西洋の影響を受ける前の古く美しい聖像だけでなく、18,19 世紀に西洋の影響を受けたさまざまなスタイルがコレクションに含まれています。ヨーロッパで、数も種類も豊富なこのようなコレクションを他に見つけることはできません。何百もの聖像のコレクションには、質の良い 18,19 世紀のアイテムが大量に含まれています。そして中には、もっと質素で飾り気のない聖像もあります。聖障（教会の壁）、バナーや碑銘（聖なる金曜日のキリストの埋葬を描写する布）などの教会の聖像も含まれています。銀メッキや金属のカバー（*oklads*）の施された高価な聖像とは対照的に主に農民の家に飾られていた質素なスタイルの聖像もあります。

元々、大変貴重で珍しいデザインだと言われた作品ではなく、一般的で、様々な種類の聖像がここに集まっています。それこそが、代表的なロシアの宗教画なのです。そしてこのコレクションを独特なものにしているのです。

***Wemhöner-Grabher* プライベートコレクションの芸術的および歴史的価値**

数点を除いて、コレクションのほとんどはオリジナルのままで修復が加えられていません。上塗りされたり、手を加えられたものではなく、原型の作品をそのまま評価することができます。オリジナル作品に基づき、それぞれ 1 点ずつが鑑定されました。その結果は 2,000 ページに及び、イラストも 700 点収められました。写真とともに詳細が記された文書はまるで美術館のカタログのようであり、個人のコレクションとしての価値をますます高めることになりました。その量と質のどちらを取ってもコレクションの価値の高さを示しています。今回の展示会はヨーロッパの聖像ミュージアムの展示とは異なります。ほとんどの場合 18,19 世紀のロシアの聖像を代表するような宗教画スタイルは含まれていません。今回の *Wemhöner-Grabher* コレクションの展示で、芸術的、歴史的価値を塗り替えることになるでしょう。

***Wemhöner-Grabher* プライベートコレクションの物的価値**

ヨーロッパで *Wemhöner-Grabher* コレクションに匹敵するものはありません。何百もの聖像や肖像は、傑作と言えるものもあれば、寒い村の工房で作られたような質素な作品もあります。従って、歴史的な価値のほうが実際の物的価値を上回っているかもしれません。このように質的、量的にも優れたコレクションをどこのアートショーでも見つけることはできないのですから、それぞれのパネルや作品の市場価値ではなく、全体的な価値を評価するべきです。コレクションを所有する一家によると、コレクターは物的価値には興味がないということです。Dirk Wilhelm Wemhöner 氏は、「物的価値は重要ではありません。私たちはすばらしいアイテムを輝かせ、そのオーラを静かに数人の親しい友と一緒に再び楽しむことができるのです」と語ります。パートナーの Karl-Heinz Grabher 氏は、「コレクションは売り物ではありません。展示会で一般公開するだけでも悩みました」と語ります。しかし両者とも何点かを選び著名なミュージアムに提供することに同意し、今回トーイワールドミュージアムでの特別展示が決まりました。「コレクションを見るたびに私たちの心は動かされます。作品が創られたときから、深い信心の心が作品とともに何百年も生き続けてきたことを忘れないで下さい。そしてこのような素晴らしい作品をほんの少しの人だけに留めていてはいけないのでしょう」と目を輝かせながら二人は語ってくれました。特別展示会場は御香のかおりに包まれることでしょう。

教会の聖像

たいてい大きな正教会には聖障があります。装飾された木の壁には信徒と祭壇を分ける 3 つのドアがあります。分けられた聖壇は、西洋の聖具保管質と同じように教会で必要な物が収められているサイドルームと考えられています。真ん中のドアの右側にはキリストの聖像が、左側には聖母マリアの聖像が飾られています。そのドアはロイヤルドアで、司祭が福音書と聖餐を運んできます。聖餐の間は、このドアは開けられていて祭壇が見えます。司祭が福音書や聖杯を運んでいないときは、外側のドアのひとつが使われます。他の誰かが聖壇へ入るときも同様です。ロイヤルドアの上には最後の晩餐の聖像があります。その上に大きな聖像があり、聖徒や教会の名前となった祝祭の聖者が描かれています。一般的なルールとして、2 番目の聖像がロイヤルドアの左手にあり、聖職任命権者を表しています。聖像の前で信者達は十字を切ったり、頭を下げたり、接吻したり、ひれ伏すことで崇拝を表します。このような崇拝は神に捧げる礼拝とはまるで別のものです。正教会の教理によれば、描かれたものを参照とするのであって、聖像そのものを崇拝するわけでないのです。像は単に木と絵の具でできた物体にすぎないのです。ビザンチン聖像は、正教会の考えとしては神に近づく具象であるとされています。四旬節の間に

信仰と祈りを持って描かた神聖な姿を映し出すもので、超人的なものへの献身と謙遜へ暗に言及しています。イコン（聖像）と言う言葉は、ギリシャ語のエイコンに由来していて、肖像や描写という意味があります。6 世紀頃から正教会の偶像を指す言葉として使われてきました。787 年ニカイアの第 7 回全地公会でローマ帝国のキリスト教信仰は聖像崇拝を復活させました。以下は、第 7 回全地公会で制定された聖像崇拝の定理の抜粋です。

「きわめて確実に最も精密に調査を遂げて定めます。神の聖堂に聖なる器また祭服に、壁に板に家に途に尊貴にして生命を施す十字架の像と等しく絵の具を持って描かれ、モザイクやその他の材料を持って製造された敬うべく聖なる像、即ち我等の主、神、救主イエス・キリストおよび聖母マリア、使徒、および聖人の聖像を置くべし。像に施すところの尊敬はその原像に帰す。」

キリスト教の供述書として正教会は議会の決定を典礼として移行、取り入れました。聖像への熱い思いは衰えることなく、聖像に熱中し従来の考えを超えて異なる感情を抱く者もありました。そのため、信者と何かを求める者の両方に多大な魅力であったのでしょう。

今日、西洋のキリスト教信者たちは聖像芸術に新たな発見を見出しています。聖像は祈る人々に何が起こるかを語りません。むしろ祈る人々に神への自己啓示と救いを提供します。何世紀もの間、聖像はずっとこのようなメッセージを示してきました。聖像は厳しい制約のもとで制作されてきました。しかし、作者は自身の自由も守ってきました。音楽家が楽譜どおり演奏しながらも自分らしさを表現するのと似ています。聖像制作は、作者にとってチャレンジでもあります。名前を伏せて制作するからです。聖像をデザインできるのは光栄なことですが、作者は自身が才能に恵まれていること、そして何にも頼ることができないことを知っていなければなりません。正教会の聖像は、このような作者のお陰で立派な作品が数々残されました。教会や家にある聖像はただ見るための物ではなく、真実や聖徒のことを思わせるためにもあります。信者にとって献身的に扱われた神聖なアイテムなのです。その前で、信者達は頭を下げ、ひれ伏し、接吻し、ロウソクやオイルランプに火を灯します。

聖像は他にどこで見られますか？

ほとんどの正教会信者の家に聖像があります。リビングルームの祈りの場所や東側の壁に掛けられています。そのほかに、美術館やコレクション、アートマーケットなどで目にすることもあります。実際、聖像は信仰のアイテムであって工芸品ではないのです。しかし、ロシアが開国し輸出を始めるようになると、信仰のアイテムは外貨を稼ぐために使われました。

聖像の奇跡

聖像のいくつかは、不思議なパワーを持ち、秘密が隠されていると言われます。そして何世紀もの間に奇跡を起こしてきました。その一つが、*Our Lady of Kazan* という題のロシアでは有名な聖像です。いつ頃作られたのかは不明です。1579 年 9 歳の女の子が火事の後に見つけたと言い伝えられています。少女の前に聖母が現れ、イスラムのタタール人が隠した不思議な聖像の場所を教えてくれました。少女はそこで聖像を見つけ、聖像は焼けずに残っていたということです。そこには、修道院が建てられ、その少女は修道院長になりました。修道院にその聖像が持ち込まれたときから奇跡が起きました。訪れた二人の盲目の男性が視力を取り戻したのです。多くの聖像のお陰で何人もの病人が回復したと言う話があります。その聖像ですが、1904 年に修道院から盗まれてしまいました。その後の行方はわかりません。17 世紀に２つの複製が作られ、ひとつはポーランドとの戦争を支え、もうひとつはナポレオンとの戦争を支えたと言われます。人々は戦時中や危機を支えてくれた聖像に感謝の気持ちを持っています。この聖像を崇拝するために聖像の名前の一部を使った教会が２軒建てられました。モスクワの赤の広場の Cathedral of Our Lady of Kazan とサンクトペテルブルグのネフスキー大通りの Kazan Cathedral です。信仰は深く後世に残されたのです。

詳細

開館時間
ミュージアム、ショップ、レストラン
毎日 10:00-18:00

トーイワールドミュージアムではスイスミュージアム共通パス及び Museums-PASS-Musées がご利用いただけます

入場料
CHF 7.00/5.00
大人が同伴の場合 16 歳以下の子供は無料

追加料金無しで特別展示をご覧いただけます。
全館車椅子で移動できます。

メディア連絡先

詳細は以下へお問い合わせください：

Laura Sinanovitch
Managing Director/Curator
Toy Worlds Museum Basle
Spielzeug Welten Museum Basel
Steinenvorstadt 1
CH-4051 Basel
Telephone +41 (0)61 225 95 95
sina@swm-basel.ch

www.swmb.museum

Background information/pictures available online at:
www.toy-worlds-museum-basle.ch
Media, password: swmb